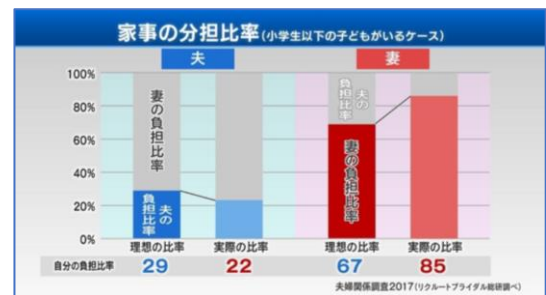




ゆとりうむの日

7月第3火曜日は、「ゆとりうむの日」だそうです（※今年は18日）。「ゆとりうむ」とは、暮らしを見直し、工夫することで「生活にゆとりを生む」に由来する言葉で、ゆとりうむプロジェクト事務局が制定しました。日常の家事には工夫次第で時間を生み出す「時産」のチャンスがいっぱいあることをより多くの人に知ってもらい、生み出したゆりの時間を楽しんでもらうことが目的だそうです。記念日は2019年（令和元年）に一般社団法人・日本記念日協会により認定・登録されました。実際に「ゆとりうむプロジェクト」のサイトを見てみると、たくさんの「時産」のアイデアが紹介されています。

さて、2016年にOECDが発表した生活時間の使い方に関する統計が右図です。これは家事にかかる時間と男性の分担率を調べたものです。経済大国と言われるアメリカ、中国、ドイツ、イギリスなどと比較してみると、日本は15%とダントツの最下位です。さらに、小学生以下の子供がいる20代～60代の夫婦約3000組を対象に実施した家事の分担比率が右下図です。この調査からも、家事の負担は圧倒的に女性に偏っていることがわかります。理想の家事分担について



聞いたところ、妻は7対3程度の分担率、つまり夫に3割程度の家事分担を期待しています。最初から半分やってほしいなどとは思っていない大らかさがあるのです。家事が大変ならば、減らす工夫をすればよさそうなものですが、日本ではなかなかそうもいきません。日本では、高度経済成長期に「夫は仕事、妻は家庭」という家族モデルが大衆化し、専業主婦を前提に、男性正社員の安定雇用・福利厚生を軸とする「生活保障」システムが機能してきました。昭和の時代が終わった頃、その仕組みに、ほころびが生じ、バブル経済が崩壊し、企業による生活保障は縮小し、非正規雇用が拡大し続けています。古き良き昭和の家族モデルが、今でも「成功体験」として記憶され、家事は「愛情のバロメーター」という意識が醸成されてきたのだと思います。しかし、これから加速度的に進む高齢化・国際化社会の中で、家事は愛情のバロメーターではなく、「生活のための技術」だと捉え直すと、自立できる程度の家事技術を男性も女性も身に付けることは、とても大切なことだと思います。だからこそ、義務教育の中で「家庭科」を学んでいるのです。